

試験研究機関名		農業技術研究所				氏名	新川 猛							
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	カキ果実の成熟に伴うカロテノイドの蓄積特性													
発表者名 (原著)	新川猛 <sup>1</sup> ・鈴木哲也 <sup>2</sup> ・松古浩樹 <sup>1</sup> ・尾関健 <sup>1</sup> ・千々和浩幸 <sup>3</sup> ・加藤雅也 <sup>4</sup> ・生駒吉識 <sup>4</sup> ( <sup>1</sup> 岐阜農技研・ <sup>2</sup> 岐阜農改普セ・ <sup>3</sup> 福岡農総試・ <sup>4</sup> 農研機構果樹研)													
口頭	発表会名 (場所)	園芸学会平成17年度春季大会研究発表(筑波大学)												
	主催機関	園芸学会												
	発表月日	西暦	2005	年	4	月	3	日						
誌上	誌名	園芸学会雑誌別冊												
	巻号等	Vol.	74	No.	1	p.	247	~ p.		西暦	2005	年	4	月
	出版または発行元	園芸学会												
	分類	<u>2</u>	1. 学術誌、 2. 学会フロンディング、 3. 試験場報告、 4. 試験場ニュース、 5. 県関係誌、 6. 商業誌 7. 総説・解説、 8. 著書、 9. その他											
<p>(要旨) カキの果皮では、10月以前の緑色期では 型カロテノイド( -カロテン、 -クリプトキサンチン、ゼアキサンチン)よりも 型カロテノイド( -カロテン、ルテイン)が蓄積していた。カロテノイド生合成系酵素遺伝子を単離し、リアルタイムPCR法によりその発現量の相対値を求めたところ、リコペンから 型のカロテノイドを生合成するLycopene- -cyclase遺伝子のmRNA発現量は全期間を通じて一定で、 型を生合成するLycopene- -cyclase遺伝子のmRNA発現量が10月15日以降急激に増加することから、これら遺伝子の発現バランスが 型並びに 型カロテノイドの蓄積に影響しているものと考えられた。一方果肉では10月15日以降急速に 型カロテノイドが蓄積し、それに伴ってPSY、PDS、Hyb等生合成系酵素遺伝子の発現量の増大が認められた。</p>														
(キーワード) カキ、カロテノイド、生合成系酵素遺伝子、mRNA発現量、リアルタイムPCR														

試験研究機関名	農業技術研究所		氏名	松尾尚典										
種別	2	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	ハスモンヨトウに対する2種類のクローン化した核多角体ウイルス混合製剤による防除効果													
発表者名 (原著)	松尾尚典・神谷克巳*・祖父江勇氣**・形見武男*・平正博* * : 岐阜県生物産業技術研究所 ** : 揖斐川工業(株)													
口頭	発表会名 (場所)	関西病虫害研究会 第87回大会 (アスト津)												
	主催機関	関西病虫害研究会												
	発表月日	西暦	2005	年	5	月	27	日						
誌上	誌名	関西病虫害研究会報												
	巻号等	Vol.	47	No.		p.	159	~ p.	160	西暦	2005	年	5	月
	出版または発行元	関西病虫害研究会												
	分類	1	1. 学術誌、 2. 学会フロンティング、 3. 試験場報告、 4. 試験場ニュース、 5. 県関係誌、 6. 商業誌 7. 総説・解説、 8. 著書、 9. その他											
(要旨)														
<p>本県が開発した核多角体ウイルス製剤IG-104水和剤(揖斐川工業)は、ダイズの若・中齢のハスモンヨトウ幼虫に対して通常散布、高濃度少量散布ともに高い防除効果を示す。このため、環境に優しい生物農薬として期待できる。</p>														
(キーワード) 生物農薬、核多角体病ウイルス、ハスモンヨトウ														

試験研究機関名		農業技術研究所				氏名		青木克典						
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	エダマメにおける防虫ネットによる虫害防除													
発表者名 (原著)	青木克典・安田雅晴・越川兼行													
口頭	発表会名 (場所)	関西病虫害研究会 第87回大会 (アスト津)												
	主催機関	関西病虫害研究会												
	発表月日	西暦	2005	年	5	月	27	日						
誌上	誌名	関西病虫害研究会報												
	巻号等	Vol.	47	No.		p.	153	~ p.	156	西暦	2005	年	5	月
	出版または発行元	関西病虫害研究会												
	分類	1	1. 学術誌、 2. 学会プロシテイング、 3. 試験場報告、 4. 試験場ニュース、 5. 県関係誌、 6. 商業誌 7. 総説・解説、 8. 著書、 9. その他											
(要旨) エダマメにおける防虫ネットによる虫害(莢加害)回避について防虫ネットの目合い及び播種時期を変えて検討したところ、各種防虫ネットの虫害に対する防除効果は高く、薬剤防除と同等以上の収量が得られた。特に、1mm目及び2mm目の防虫ネットは防除効果、収量及び価格面から普及性が														
(キーワード) エダマメ、防虫ネット、虫害														

試験研究機関名	農業技術研究所				氏名	天野昭子								
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	農産物の残留農薬検査における市販のフェニトロチオン測定用キットの実用性													
発表者名 (原著)	天野昭子、矢野秀治													
口頭	発表会名 (場所)	関西病虫害研究会 第87回大会 (津市)												
	主催機関	関西病虫害研究会												
	発表月日	西暦	2005	年	5	月	27	日						
誌上	誌名	関西病虫害研究会報												
	巻号等	Vol.	47	No.		p.	167	~ p.	168	西暦	2005	年	5	月
	出版または発行元	関西病虫害研究会												
	分類	1	1. 学術誌、 2. 学会フロンディング、 3. 試験場報告、 4. 試験場ニュース、 5. 県関係誌、 6. 商業誌 7. 総説・解説、 8. 著書、 9. その他											
<p>(要旨) イムノアッセイを利用した市販の簡易農薬検査キット(フェニトロチオン用)を用いて、各種農産物における測定精度について検討した。(株)ホリバ・バイオテクノロジー社製のフェニトロチオン用キット(以下、従来タイプと略)及び高感度フェニトロチオン用キット(以下、高感度タイプと略)を対象に、トマト、イチゴ、ナス、ピーマン、キュウリ、キャベツ、ダイコン、ニンジン、りんご、ナシ、及びダイズについて、フェニトロチオンの添加回収試験を行った。従来タイプは、イチゴを始め8作物で回収率が130%を超えていた。高感度タイプではいずれの作物も回収率は80~130%に収まっていたが、測定値のバラツキは大きくなり、特にピーマンとニンジンでは変動係数が30%を超えていた。測定可能範囲はキットの製品により異なるが、検量線の下限值近くでマトリクス効果が大きくなるため、使用時には試料の希釈倍率を良く検討する必要</p>														
<p>(キーワード) 農薬残留、自主検査、イムノアッセイ、フェニトロチオン、</p>														

試験研究機関名		農業技術研究所				氏名		渡辺秀樹						
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	カキ果実軟腐病発生ほ場における <i>Pestalotiopsis</i> 属菌の消長													
発表者名 (原著)	渡辺秀樹・尾関 健													
口頭	発表会名 (場所)	関西病虫害研究会 第87会大会(津市)												
	主催機関	関西病虫害研究会												
	発表月日	西暦	2005	年	5	月	27	日						
誌上	誌名	関西病虫害研究会報												
	巻号等	Vol.	47	No.		p.	119	~ p.	121	西暦	2005	年	5	月
	出版または発行元	関西病虫害研究会												
	分類	1	1. 学術誌、 2. 学会フロンディング、 3. 試験場報告、 4. 試験場ニュース、 5. 県関係誌、 6. 商業誌 7. 総説・解説、 8. 著書、 9. その他											
<p>(要 旨) カキ果実軟腐病は <i>Pestalotiopsis longiseta</i> および <i>P. foedans</i> によって引き起こされる病害で、収穫期の早生甘カキに黒変を伴った果実軟化を引き起こす。本属菌の他種はカキ葉に葉枯病、輪紋病を引き起こすことが知られている。そこで、現地ほ場における本属菌の消長を調べるため、2001~2002年に葉および果実を経時的に採取し分離頻度を調べた。その結果、5月中旬の葉および果実上には既に本属菌が存在することが明らかになった。葉においては6月にかけて分離頻度が上昇し、8月頃一時的に減少、9月以降再び上昇する傾向が認められた。果実では果頂部よりヘタ際部で分離頻度が高かった。葉および果実から分離した本属菌をカキ果実に接種したところ、いずれも樹上で病原性が認められ、菌株によって発病程度には差異が認められた。</p>														
(キーワード) カキ果実軟腐病、 <i>Pestalotiopsis</i>														

試験研究機関名		農業技術研究所				氏名		堀之内勇人						
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	拮抗微生物と生分解性ポットを利用したトマト褐色根腐病の防除													
発表者名 (原著)	堀之内勇人・渡辺秀樹・田口義広*・百町満朗** (岐阜農技研、*アリスライフサイエンス、**岐阜大学)													
口頭	発表会名 (場所)	関西病虫害研究会 第87回大会 (三重県津市)												
	主催機関	日本植物病理学会												
	発表月日	西暦	2005	年	5	月	27	日						
誌上	誌名	関西病虫害研究会報												
	巻号等	Vol.	47	No.		p.	172	~ p.		西暦	2005	年	5	月
	出版または発行元	関西病虫害研究会												
	分類	1	1. 学術誌、 2. 学会フロンディング、 3. 試験場報告、 4. 試験場ニュース、 5. 県関係誌、 6. 商業誌 7. 総説・解説、 8. 著書、 9. その他											
<p>(要旨) 培養土を入れたペーパーポットに非病原性Fusarium (F13菌株、出光興産(株)から分譲)の孢子懸濁液を10ml灌注処理した。播種34日後に褐色根腐病菌汚染土を入れた径10.5cmのポットにペーパーポット苗をそのまま移植した。移植56日後に発病状況を調べた結果、ペーパーポットと非病原性Fusarium の組み合わせ処理区では発病を抑制し、防除価は53であった。さらに同様の方法で圃場試験を行った結果、Fusarium equiseti (GF191)と生分解性ポットを組み合わせ処理することで発病が抑制され、その防除価は62であった。以上のことから、拮抗微生物と生分解性ポット、ペーパーポットなどを組み合わせて処理することによりトマト褐色根腐病の発病を抑制できることがわかった。</p>														
(キーワード) 拮抗微生物、トマト褐色根腐病、生分解性ポット、生物防除														

試験研究機関名		農業技術研究所				氏名		松古 浩樹						
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	汚染土壌根圏の水分と重金属の移動													
発表者名 (原著)	松古浩樹													
口頭	発表会名 (場所)	市川市文化会館												
	主催機関	日本地下水学会・日本水環境学会・地盤工学会・土壌環境センター												
	発表月日	西暦	2005	年	6	月	17	日						
誌上	誌名													
	巻号等	Vol.		No.		p.		~ p.		西暦		年		月
	出版または発行元													
	分類 <sup>(注)</sup>	<u>3</u>	1. 学術論文				2. 学術図書				3. 講演・報告			4. その他
(要旨)														
Phytoremediation の Phytostabilization 効果に注目し、植物の排水抑制効果や拡散防止効果によって、汚染土壌・地下水等のリスク低減を目標とした研究を行うこととし、地上部、地下部も含め Phytoremediation の実用化に向けた知見を温室カラム実験にて実験的に得ることを目的とした。結果として、Phytostabilization による排水抑制は、大変効果的であり、排水量とかん水(雨量)に $R=sL^r$ と定量的な評価ができた。														
(キーワード)														
Phytoremediation、Phytostabilization、排水抑制														

試験研究機関名	農業技術研究所				氏名	棚橋寿彦								
種別	2	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	家畜ふん堆肥からの塩酸抽出の意義と肥料成分の簡易分析法													
発表者名 (原著)	棚橋寿彦													
口頭	発表会名 (場所)													
	主催機関													
	発表月日	西暦		年		月		日						
誌上	誌名	農業技術												
	巻号等	Vol.	60	No.	7	p.	308	~ p.	312	西暦	2005	年	7	月
	出版または発行元	農業技術協会												
	分類	<u>6</u>	1. 学術誌、 2. 学会フ <sup>o</sup> ロシテ <sup>o</sup> イング、 3. 試験場報告、 4. 試験場ニュース、 5. 県関係誌、 6. 商業誌 7. 総説・解説、 8. 著書、 9. その他											
<p>(要旨)</p> <p>家畜ふん堆肥からの塩酸抽出を行うことにより、リン酸、塩基が常法である湿式灰化法と同等の抽出される。また、本抽出により通常塩化カリウム溶液では全量抽出できなかったアンモニア態窒素が抽出でき、硝酸態窒素は同等に抽出できる。この塩酸抽出による無機態窒素量により窒素肥効が推定できる堆肥もある。</p> <p>この塩酸抽出液中のアンモニア、硝酸、リン、カリウム、カルシウム、マグネシウムは小型反射式光度計を用いて簡易に分析が可能である。</p>														
(キーワード) 家畜ふん堆肥、アンモニア、硝酸、リン酸、加里、石灰、苦土、塩酸抽出														



試験研究機関名		農業技術研究所					氏名		天野昭子					
種別	2	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	農産物中の残留イミダクロプリドの分析における市販ELISAキットの実用性能評価													
発表者名 (原著)	天野昭子・矢野秀治													
口頭	発表会名 (場所)													
	主催機関													
	発表月日	西暦		年		月		日						
誌上	誌名	日本農薬学会誌												
	巻号等	Vol.	30	No.	3	p.	249	~ p.	253	西暦	2005	年	8	月
	出版または発行元	日本農薬学会												
	分類 <sup>(注)</sup>	<u>1</u>	1. 学術論文					2. 学術図書					3. 講演・報告	
<p>(要旨) 農産物の残留農薬調査における、市販のイミダクロプリド測定キットの実用性について検討した。6名の作業者による、同一試料を用いた測定値の再現性試験では、いずれの作業者の添加回収率および繰り返し再現精度は安定かつ良好であった。また、トマト、イチゴ、ナス、ピーマン、キュウリ、キャベツ、ダイコン、ニンジン、リンゴ、ナシおよびダイズを用いた添加回収試験では、いずれも回収率は良好であった(94.2 ~ 132.0%)。</p> <p>以上より、イミダクロプリド測定用キットは農産物の残留農薬のスクリーニングに有効な手段であると言える。</p>														
(キーワード) イムノアッセイ法、ELISAキット、イミダクロプリド、農産物、残留農薬														

試験研究機関名	農業技術研究所				氏名	新川 猛								
種別	2	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	カキの機能性成分とその増強方法に関する研究の現状													
発表者名 (原著)	新川 猛													
口頭	発表会名 (場所)													
	主催機関													
	発表月日	西暦		年		月		日						
誌上	誌名	果実日本												
	巻号等	Vol.	60	No.	9	p.	24	~ p.	29	西暦	2005	年	9	月
	出版または発行元	日本園芸農業協同組合連合会												
	分類	<u>6</u>	1. 学術誌、 2. 学会 <sup>°</sup> シンポジウム <sup>°</sup> 、 3. 試験場報告、 4. 試験場コース、 5. 県関係誌、 6. 商業誌 7. 総説・解説、 8. 著書、 9. その他											
(要 旨) カキには多くの生体調節機能を有する機能性成分が含まれており、ビタミンCやカロテノイド、ポリフェノールが多い。またカキ葉に含まれるフラボノイド配糖体は抗アレルギー性活性が強く、花粉症の緩和が期待できる。一方、果実中のカロテノイドの蓄積は時期によって蓄積する種類が異なるが、 ークリプトキサンチンとリコペンが多く含有される。 ークリプトキサンチンは、低温より高温条件下で蓄積が進むことが明らかとなり、貯蔵温度や栽培期間中の温度を高くすることによって、これらの成分含有量を増加させることが可能となる。														
(キーワード) カキ、機能性成分、 ークリプトキサンチン、 ビタミンC														

試験研究機関名	農業技術研究所				氏名	新川 猛								
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	貯蔵温度の違いによるカキ果実中の $\gamma$ -クリプトキサンチン含有量の変化													
発表者名 (原著)	新川猛(栽培部)・松古浩樹(育種部)・尾関 健(栽培部)・加藤雅也(農研機構果樹研) ・生駒吉識(農研機構果樹研)													
口頭	発表会名 (場所)	日本食品科学工学会第52回大会(北海道大学)												
	主催機関	社団法人 日本食品科学工学会												
	発表月日	西暦	2005	年	8	月	30	日						
誌上	誌名	日本食品科学工学会第52回大会講演集												
	巻号等	Vol.	52	No.		p.	108	~ p.		西暦	2005	年	8	月
	出版または発行元	日本食品科学工学会第52回大会事務局												
	分類	1	1. 学術誌、 2. 学会フロンティング、 3. 試験場報告、 4. 試験場コース、 5. 県関係誌、 6. 商業誌 7. 総説・解説、 8. 著書、 9. その他											
(要 旨) カキに含まれる $\gamma$ -クリプトキサンチン(CRY)は、高い発ガン抑制効果等を有すると考えられている機能性成分である。カキ果実中の $\gamma$ -CRYの収穫後の貯蔵中の挙動とカロテノイドの代謝調節について検討したところ、25℃の高温下では、カロテノイド生合成酵素の一種である $\gamma$ -Ring hydroxylase遺伝子のmRNAレベルが増加し、 $\gamma$ -CRYの含有量が高くなった。増加量は収穫9日後で1.8~2.3倍となった。また高温での長期間保存中の軟化リスクを低減するため1-MCPを使用したところ、 $\gamma$ -CRYの蓄積への阻害要因とならず、また酵素のmRNA転写にも影響を及ぼさなかった。														
(キーワード) カキ、 $\gamma$ -クリプトキサンチン、カロテノイド生合成関連酵素遺伝子、1-MCP														

試験研究機関名	農業技術研究所				氏名	新川 猛								
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	岐阜県におけるカキの機能性成分に関する研究開発の現状													
発表者名 (原著)	新川 猛													
口頭	発表会名 (場所)	関東東海北陸農業試験研究推進会議果樹部会平成17年度現地研究会 (熊野簡易保険保養センター)												
	主催機関	関東東海北陸農業試験研究推進会議果樹部会												
	発表月日	西暦	2005	年	9	月	26	日						
誌上	誌名	関東東海北陸農業試験研究推進会議果樹部会平成17年度現地研究会資料												
	巻号等	Vol.		No.		p.	17	~ p.	20	西暦		年		月
	出版または発行元	関東東海北陸農業試験研究推進会議果樹部会												
	分類 <sup>(注)</sup>	<u>3</u>	1. 学術論文				2. 学術図書				3. 講演・報告		4. その他	
<p>(要旨)</p> <p>岐阜県におけるカキの機能性研究の取り組みについて紹介した。カキの果実に含まれる機能性成分の一つである ークリプトキサンチンを増加させる目的で現在行っている研究内容のうち、カロテノイドの蓄積特性、収穫後における果実中の機能性成分の変化、機能性成分を増強させる栽培方法の開発についての事例発表を行った。</p>														
<p>(キーワード)</p> <p>カキ、カロテノイド、機能性成分、アスコルビン酸</p>														

試験研究機関名		農業技術研究所				氏名		渡辺秀樹						
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	Pythium irregulare によるゼラニウム茎腐病の発生 (病原菌追加)													
発表者名 (原著)	渡辺秀樹・堀之内勇人・市原志信*・桑原圭司*・山田貴子**・景山幸二*** (岐阜農技研・*岐阜普及企画・**西濃地域農改セ・***岐阜大流域研セ)													
口頭	発表会名 (場所)	平成17年度日本植物病理学会関西西部会 (名城大学：名古屋市)												
	主催機関	日本植物病理学会												
	発表月日	西暦	2005	年	9	月	18	日						
誌上	誌名													
	巻号等	Vol.		No.		p.		~ p.		西暦		年		月
	出版または発行元													
	分類 <sup>(注)</sup>	==	1. 学術論文					2. 学術図書						
		3. 講演・報告					4. その他							
(要旨)														
<p>2005年2月に、岐阜県内の複数の鉢花生産施設で、ゼラニウムの地際茎が暗褐色水浸状に腐敗する被害が発生した。3施設から採取した発病株の罹病組織からは、いずれも形態的に同一と考えられる <i>Pythium</i> 属菌が高率に分離され、接種により病徴が再現された。本菌は楕円形の胞子のうを形成し、proliferating は認められなかった。蔵卵器の大きさは平均 18μm で、表面に突起を有しているものも認められた。蔵精器は主に同菌糸性で、蔵卵器に 1-2 個付着した。菌糸生育は 5 から 35 で認められ、最適温度は 28 であった。これらの形態的特徴から本菌を <i>Pythium irregulare</i> Buisman と同定した。<i>P. irregulare</i> は RAPD 解析から I-IV のグループに分類されることが知られているが、ゼラニウムに発生した分離菌は I および II に分類された。ゼラニウム茎腐病の病原菌には、<i>Paphanidermatum</i>、<i>P. splendens</i> および <i>Pythium</i> sp. が既に報告されており、本病の病原菌として <i>P. irregulare</i> を追加したい。</p>														
(キーワード) ゼラニウム、茎腐病、 <i>Pythiumirregulare</i>														

試験研究機関名		農業技術研究所				氏名		新川 猛						
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	カキのカロテノイド蓄積及び生合成酵素遺伝子発現の品種間差													
発表者名 (原著)	新川猛1・尾関健1・加藤雅也2・生駒吉識2(1 岐阜農技研・2 農研機構果樹研)													
口頭	発表会名 (場所)	園芸学会平成17年度秋季大会(東北大学)												
	主催機関	園芸学会												
	発表月日	西暦	2005	年	10	月	1	日						
誌上	誌名	園芸学会雑誌												
	巻号等	Vol.	74	No.	別2	p.	356	~ p.		西暦		年		月
	出版または発行元	園芸学会												
	分類 <sup>(注)</sup>	<u>3</u>	1. 学術論文 3. 講演・報告					2. 学術図書 4. その他						
<p>(要旨)</p> <p>成熟期の異なるカキの品種におけるカロテノイド蓄積機構についての解明を試みた。型のカロテノイド(型カロテン、ルテイン)は、成熟初期の緑色期に蓄積し、かつ成熟期の早い品種での蓄積量が多い。一方、型カロテノイドは、カロテノイド生合成系の下流に位置する物質から順次蓄積していくものと考えられた。また、カロテノイド生合成関連酵素のmRNA転写量が多い「刀根早生」の蓄積量が少ない要因は、カロテノイドの代謝が活発であるため、カロテノイドの切断が進みやすいためでは無いかと推察された。</p>														
(キーワード) カキ、色素、カロテノイド、生合成酵素遺伝子、リアルタイムPCR														

試験研究機関名	農業技術研究所					氏名	越川 兼行							
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	イチゴ高設ベンチ栽培における培養液循環栽培システムに関する研究(第3報)													
発表者名 (原著)	越川兼行、安田雅晴													
口頭	発表会名 (場所)	園芸学会平成17年度秋季大会												
	主催機関	園芸学会												
	発表月日	西暦	2005	年	10	月	2	日						
誌上	誌名	園芸学会雑誌 第74巻 別冊2												
	巻号等	Vol.	74	No.	2	p.	442	~ p.		西暦	2005	年	10	月
	出版または発行元	園芸学会												
	分類 <sup>(注)</sup>	<u>3</u>	1. 学術論文 3. 講演・報告					2. 学術図書 4. その他						
<p>(要旨) イチゴ高設ベンチ「岐阜県方式」の培養液閉鎖系システムにおいて、P、K、Ca及びMgのシステム系内の各部位の濃度の推移を1作通じて示し、循環培養液の4成分の組成バランスがフレッシュな掛け流し培養液と同様に安定して得られることを明らかにした。このときの重要な条件として、過不足のない新しい時期別の肥料、適正は給排水管理とEC濃度管理が必要である。</p>														
<p>(キーワード) イチゴ、養液栽培、培養液閉鎖系システム、循環培養液、リン酸、加里、石灰、苦土</p>														

試験研究機関名		農業技術研究所				氏名	尾関 健							
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	カキ ' 富有 ' 園における下草由来窒素の吸収特性と果実品質への影響													
発表者名 (原著)	尾関健													
口頭	発表会名 (場所)	東北大学												
	主催機関	園芸学会												
	発表月日	西暦	2005	年	10	月	2	日						
誌上	誌名													
	巻号等	Vol.		No.		p.		~ p.		西暦		年		月
	出版または発行元													
	分類 <sup>(注)</sup>	==	1. 学術論文				2. 学術図書				3. 講演・報告			4. その他
<p>(要旨)</p> <p>カキ園における夏季以降の下草(ナギナタガヤ、ヘアリベッチ)由来の還元窒素のカキ樹への吸収移行特性について<sup>15</sup>Nトレーサー法によって調査した結果、窒素が10aあたり3~5kg程度吸収されるものの、多くは貯蔵組織に吸収移行され、果実への吸収移行は少なく、品質への影響は認められなかった。</p>														
(キーワード) カキ、 <sup>15</sup> Nトレーサー法、草生栽培、窒素吸収、果実品質														



試験研究機関名		農業技術研究所				氏名		安田 雅晴						
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	イチゴの底面給水育苗における銅吸着不織布の利用効果													
発表者名 (原著)	安田雅晴・越川兼行													
口頭	発表会名 (場所)	園芸学会平成17年度秋季大会 (東北大学)												
	主催機関	園芸学会												
	発表月日	西暦	2005	年	10	月	02	日						
誌上	誌名	園芸学会雑誌												
	巻号等	Vol.	74	No.	2	p.	177	~ p.		西暦	2005	年	10	月
	出版または発行元	園芸学会												
	分類 <sup>(注)</sup>	<u>3</u>	1. 学術論文 3. 講演・報告				2. 学術図書 4. その他							
<p>(要旨) イチゴの底面給水による高設ベンチ育苗体系「ノンシャワー育苗」は、頭上灌水による高設ベンチ育苗に比べ病害抑制効果が高いが、ポットの下穴から根が多く伸長するため、定植作業時にポットを外す作業が煩雑になる等の問題が生じている。そこで、本研究では、銅を吸着させた綿不織布を底面給水マットとして利用することで、ポット下穴からの根の伸長抑制効果を検討した結果、高い伸長抑制を示した。また、銅吸着不織布を使用することで、これまでの資材の4層構造を2層にすることが可能で、資材を展張する労力を削減できる。</p>														
(キーワード) イチゴ・底面給水・銅・根														

試験研究機関名		農業技術研究所					氏名		渡辺 秀樹					
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	岐阜県における代替技術普及の取り組み													
発表者名 (原著)	渡辺秀樹													
口頭	発表会名 (場所)	平成17年度野菜茶業課題別研究会 「新段階を迎えた臭化メチル規制とその対策技術」 (名古屋市中区 栄ガスホール)												
	主催機関	独立行政法人 農業・生物系特定産業技術研究機構 野菜茶業研究所												
	発表月日	西暦	2005	年	10	月	7	日						
誌上	誌名	平成17年度野菜茶業課題別研究会 「新段階を迎えた臭化メチル規制とその対策技術」 講演要旨												
	巻号等	Vol.		No.		p.	53	~ p.	58	西暦		年		月
	出版または発行元	独立行政法人 農業・生物系特定産業技術研究機構 野菜茶業研究所												
	分類 <sup>(注)</sup>	<u>3</u>	1. 学術論文 3. 講演・報告					2. 学術図書 4. その他						
(要旨) 臭化メチルは土壌くん蒸剤として広く使用されてきたが、2005年度で一部の例外的措置を除いて事実上使用できなくなった。代替技術は、化学的土壌消毒法や物理的土壌消毒法などがその中心であり、各府県等で様々な検討がなされてきている。岐阜県では、夏秋トマトの土壌病害対策として物理的土壌消毒の1つである土壌還元消毒が普及しつつあり、その事例について紹介した。														
(キーワード) 臭化メチル、物理的土壌消毒法、土壌還元消毒法、夏秋トマト、土壌病害														

試験研究機関名		農業技術研究所				氏名		棚橋 寿彦						
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	家畜ふん堆肥の種類に応じた窒素肥効評価法													
発表者名 (原著)	棚橋 寿彦													
口頭	発表会名 (場所)	関東東海北陸農業試験研究推進会議 関東東海・土壌肥料部会平成17年度秋季研究会 (長野県千曲市上田館)												
	主催機関	中央農業総合研究センター												
	発表月日	西暦	2005	年	10	月	13	日						
誌上	誌名	平成17年度関東東海・土壌肥料部会度秋季研究会												
	巻号等	Vol.		No.		p.	25	~ p.	30	西暦		年		月
	出版または発行元	中央農業総合研究センター												
	分類 <sup>(注)</sup>	<u>3</u>	1. 学術論文				2. 学術図書				3. 講演・報告			4. その他
<p>(要旨)</p> <p>岐阜県における家畜ふん堆肥の窒素肥効評価に関する取り組みについて紹介。  家畜ふん堆肥中には従来のアンモニア態窒素抽出法では抽出されないアンモニア態窒素が多く存在し、これらを抽出測定することにより、堆積発酵方式の牛ふん・豚ふん堆肥や、すべての鶏ふん堆肥で短期的な窒素肥効評価が可能となる。また、この推定に用いる塩酸抽出によりリン酸・加里等の成分もほぼ全量抽出できることから、堆肥分析の簡易な抽出法として有効である。</p>														
<p>(キーワード)</p> <p>堆肥、アンモニア態窒素、塩酸、窒素肥効</p>														

試験研究機関名		農業技術研究所				氏名		福田 富幸						
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	展着剤を加用した微酸性電解水によるキュウリうどんこ病防除 ：整枝法の違いが防除効果に及ぼす影響													
発表者名 (原著)	福田富幸、勝山直樹													
口頭	発表会名 (場所)	第4回日本機能水学会学術大会 (函館国際ホテル)												
	主催機関	日本機能水学会、財団法人機能水研究振興財団												
	発表月日	西暦	2005	年	10	月	14	日						
誌上	誌名	日本機能水学会学術大会講演要旨集												
	巻号等	Vol.		No.		p.	18	~ p.		西暦	2005	年	10	月
	出版または発行元	日本機能水学会												
	分類 <sup>(注)</sup>	3	1. 学術論文 3. 講演・報告				2. 学術図書 4. その他							
(要旨)														
栽培法(整枝法)の違いが、展着剤を加用した微酸性電解水のキュウリうどんこ病の防除効果に及ぼす影響を検討した。つる下げ栽培では、週1回、250ml/株の散布で効率が良く、一方、摘心栽培では、週2回の散布が必要であることが示唆された。														
(キーワード) 微酸性電解水、展着剤、キュウリうどんこ病、摘心栽培、つる下げ栽培														

試験研究機関名		農業技術研究所				氏名		松古 浩樹						
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	DNA マーカーによる岐阜平坦地水稲奨励品種の品種判別													
発表者名 (原著)	松古浩樹													
口頭	発表会名 (場所)	日本作物学会東海支部 (岐阜大学大学院連合研究科棟合同セミナー室)												
	主催機関	日本作物学会東海支部												
	発表月日	西暦	2005	年	11	月	9	日						
誌上	誌名													
	巻号等	Vol.		No.		p.		~ p.		西暦		年		月
	出版または発行元													
	分類 <sup>(注)</sup>	<u>3</u>	1. 学術論文				2. 学術図書				3. 講演・報告			4. その他
<p>(要旨)</p> <p>8 品種の岐阜県平坦地奨励品種を判別できる 2 セットのマルチプレックス PCR プライマーセットを開発した。PCR の鋳型 DNA は、葉片から DNA 抽出キット (ISOPLANT ) を用いて抽出精製したゲノム DNA を用いた。15 種類の “ sequence-tagged site ” (STS) プライマーを PCR で増幅し、その中から、中生の岐阜県平坦地奨励品種 (白雪姫、あさひの夢、みににしき、ハツシモ、モチミノリ) を判別するマルチプレックス PCR プライマーセットと 8 種類の岐阜県平坦地奨励品種の内、ハツシモだけ検出しないマルチプレックス PCR プライマーセットを開発した。</p>														
<p>(キーワード) 品種判別、岐阜県平坦地奨励品種、マルチプレックス PCR、STS プライマー</p>														

試験研究機関名		農業技術研究所				氏名		米山 誠一						
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	可搬型送風式捕虫機による茶吸汁性害虫の防除効果検討													
発表者名 (原著)	米山誠一													
口頭	発表会名 (場所)	茶業技術研究発表会 (静岡県島田市宮美殿)												
	主催機関	日本茶業技術協会												
	発表月日	西暦	2005	年	11	月	14	日						
誌上	誌名	茶業研究報告 (別冊)												
	巻号等	Vol.	100	No.		p.	81	~ p.	82	西暦	2005	年	11	月
	出版または発行元	日本茶業技術協会												
	分類 <sup>(注)</sup>	<u>3</u>	1. 学術論文				2. 学術図書				3. 講演・報告			4. その他
(要旨)														
<p>化学合成農薬使用量の削減技術を確立するため、可搬型送風式捕虫機のチャノミドリヒメヨコバイとチャノキイロアザミウマに対する防除効果を検討した。二番茶期の試験では、チャノミドリヒメヨコバイの少～中発生条件下で約60%の被害防止効果が認められた。三番茶期の試験では、同虫の中～多発生条件下で被害防止効果は低かった。チャノキイロアザミウマではいずれの試験においても被害防止効果は低かった。以上から、本捕虫機の処理によりチャノミドリヒメヨコバイの小～中発生条件下で防止効果が確認されたが、多発生条件下では効果が劣るものと考えられた。また、チャノキイロアザミウマの被害防止効果は期待できないと考えられた</p>														
(キーワード)														
チャ、送風式捕虫機、チャノミドリヒメヨコバイ、被害防止効果														

試験研究機関名		農業技術研究所				氏名		松古 浩樹						
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	室内実験に基づく土壌汚染の拡散防止に対する根圏機能の評価													
発表者名 (原著)	松古浩樹													
口頭	発表会名 (場所)	地下水地盤環境に関するシンポジウム2005 (建設交流館グリーンホール)												
	主催機関	地下水地盤環境に関する研究協議会												
	発表月日	西暦	2005	年	11	月	27	日						
誌上	誌名	地下水地盤環境に関するシンポジウム2005 発表論文集												
	巻号等	Vol.		No.		p.	19	~ p.	24	西暦	2005	年	11	月
	出版または発行元	地下水地盤環境に関する研究協議会												
	分類 <sup>(注)</sup>	1	1. 学術論文					2. 学術図書						
	==	3. 講演・報告					4. その他							
<p>(要旨)</p> <p>Phytoremediation の一つである植物による排水抑制や拡散防止効果 ( Phytostabilization ) の知見を得るため、温室内でカラムを用いた実験の結果を報告し、汚染拡散防止に対する根圏の機能を紹介する。カラム土壌に射撃場跡地の鉛汚染土壌、植物はギニアグラスとケナフを用いた。その結果、植生カラム下部からの排水量が植生なしより少なくなり、Phytostabilization による排水抑制効果が証明された。また、拡散防止効果についても、植生なし区に対し植生区は、土壌表面からの深度 50 cm ( 根圏下部 ) の鉛濃度が高いものの、カラム下端の排水鉛濃度は低くなる傾向を示した。</p>														
(キーワード) ファイトスタビリゼーション、鉛汚染土壌														

試験研究機関名		農業技術研究所				氏名	松古 浩樹							
種別	1	1. 口頭、2. 誌上												
題名 (原著)	植物による汚染土壌の浄化													
発表者名 (原著)	松古浩樹													
口頭	発表会名 (場所)	日本原子力研究開発機構 高崎量子応用研究所 高崎ベンチャー棟大会 議室												
	主催機関	日本原子力研究開発機構 量子ビーム応用研究部門 高崎量子応用研究 所												
	発表月日	西暦	2006	年	1	月	27	日						
誌上	誌名													
	巻号等	Vol.		No.		p.		~ p.		西暦		年		月
	出版または発行元													
	分類 <sup>(注)</sup>	<u>3</u>	1. 学術論文				2. 学術図書				3. 講演・報告			4. その他
(要旨)														
<p>射撃場の高濃度鉛汚染土に対するファイトレメディエーションの現地圃場実験を通じて得られた知見をまとめると、以下ようになる。</p> <p>1) タデ科ソバは鉛高集積植物で、耐候性も優れていることからファイトレメディエーションに適しているが、根圏が浅いため汚染が深い場合には、他の植物との混植や深耕が必要である。</p> <p>2) スーダングラス及びギニアグラスの再生植物による鉛蓄積量効果は、生育速度が、再生後速くなるため、一定期間に2度播種するよりも、再生植物を利用した方法が効果的である。</p>														
(キーワード) ファイトイクストラクション、そば														